

氏 名 山田 香織

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1109 号

学位授与の日付 平成 20 年 3 月 19 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 フェラインの民族誌
ードイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーションー

論文審査委員 主 査 教授 出口 正之
教授 竹沢 尚一郎
准教授 宇田川 妙子
教授 野村 雅一（京都外国語大学）
教授 ハラルド・クラインシュミット
（筑波大学）

論文内容の要旨

本論文は、ドイツにおいてフェラインと称されるローカル・アソシエーションについて、そこに関わる人びとに着目することで民族誌的記述をおこない、これまでゲマインシャフト／ゲゼルシャフトの二元論に囚われてきたフェラインの見方を再考することを目的としている。

共通の目的を掲げ、定款に基づいた契約関係の下にあり、参加を個人の自由意思に委ねるところの団体であるフェラインは、ドイツに18世紀中葉に出現したとされ、各時代の社会状況に応じてそれぞれの役割を担ってきた。21世紀を迎えた今日にあっても、一方では意味や機能を変容させながら存続し、他方では多様な目的を掲げるものが新設され、その数は増加傾向にある。

フェラインを扱った先行研究は、歴史学、社会学、民俗学の分野にみることができる。分野によって問題関心が異なるため、対象への接近法や時代設定に差異がある。しかしいずれの分析も、ゲマインシャフト／ゲゼルシャフトの二分法を下敷きとしている点で共通する。一方には、近代以前の身分的・社团的な関係との対比で、近代市民社会の構造的メルクマール、つまりゲゼルシャフト的集団だとする解釈があり、他方には、そこに血縁・地縁関係が持ち込まれたり、地域社会への帰属意識の高揚のために利用されたりする点に注目して、ゲマインシャフト的集団だとする見解が存在する。このような解釈の齟齬の背景には、参照点が組織形態に収斂する傾向にあったことがある。

本論文ではそうした点を踏まえ、フェラインの全体像を把握するために、組織形態やその具体的活動に加えて、メンバーのフェラインへの関与の様態やメンバー間の関係性についても分析した。また、活動内容、成員構成、彼らの相互関係を、「見えるコード」と「見えないコード」に分けて記述することで、新しい視点を打ち出した。これは、分子生物学の二重らせん構造の概念に示唆を受けたものである。

序論で先行研究の整理と問題提起をしたのち、第1章では、調査地とそこに拠点をおくフェラインの概要、次章以降で論じる男声合唱団の概略を述べた。続く第2章では、「見えるコード」と「見えないコード」を用いて、活動と成員構成を類型化しながら詳述した。第3章では、フェラインが任意で所有する旗に焦点をあて、そこに象徴される事象を考察した。第4章では、メンバーの振る舞いや語りを取り上げて、メンバーシップのありよう、そこに関わるものの意味、フェラインの社会的意味を分析した。

各章の論点は、以下の3つにまとめることができる。

第1点は、フェラインの活動と成員構成についてである。フェラインでは、定款に記された活動をおこない、それによって目的の達成を目指す。そこには、組織運営や、政治・経済・宗教活動の忌避についての記載もあり、各フェラインはこれを遵守している。しかし、活動様態を詳しくみていくと、定款に反してはいないものの、完全に準じているともいい難い状況があることが浮き彫りとなる。本論ではこれを、役員を選出を事例として挙げて説明した。また、目的に関心がある者であれば誰でも入会可能と規定されているものの、実際のメンバー構成には、以前からの個人的なつながりが影響していることも明らかにした。さらに、親睦行事、目的の遂行とは関連しない他フェラインや行政や教会の行事への参加、メンバーの人生儀礼への出席といった、定款に記されていない活動がおこなわ

れている点にも言及した。

これらの諸相が混在することを明示できた本論は、このうちのいずれかの点に焦点をあてていた先行研究とは異なる視座に立つものといえる。そしてそれは、「見えるコード」と「見えないコード」という区分けを用いることではじめて可能になった。

第2点は、フェライン間の関係性についてである。フェラインは、同じ場所に拠点を置いていても、相互に関連性を持たない別個に発生した組織のようにみえる。しかし実際は、競合回避という隠れた規範のもとでつくられている。バイエルン州の州都ミュンヘンの南に位置するA町で活動するフェラインが掲げる目的に着目すると、原則として、同じ目的を掲げたり、同一の活動に従事するものが存在しないことがわかる。これは、人びとのあいだに暗黙の了解が存在することを示唆している。

他方、フェラインのあいだには旗を介した関係性が存在する。旗はフェラインが任意に作製するものである。しかしそれを所有すると、旗を持つ他のフェラインや、教会や行政といった権威をもつ組織とつながりをもつことになる。その関係性は、各組織が主催する行事に参加し、そこで旗を掲揚することで明示される。また、旗を所有するフェライン同士の関係性は、ペナントリボンの授受や行事の際の整列順によって可視化される。さらに地域社会の承認という点でのフェライン間のヒエラルキーが、旗の有無によって表される。

第3点は、メンバー間の関係性についてである。定款にはメンバーの義務と権利に関する記載があり、彼らは同額の会費を支払うことで義務を果たし、権利を獲得する。こうして定款は、メンバーに対等な関係を保障している。これは「見えるコード」の下にある対等性である。他方、「見えないコード」の下にもそれを見ることができる。「見えないコード」としての対等性は、親称での呼び合い、挨拶の仕方、誕生日会に出席するといった振る舞いや行動として表され、会話の仕方に暗黙の了解を持ち込んだり、スタンドプレーを排除することで維持されている。また、彼らの関係性には非対等性も確認できる。さらに、対等性を示す行為は、親密性の表明とも解釈できるものである。

フェラインが、数十年にわたって存在できるのは、ひとつにはこうした対等性と非対等性、目的遂行性と親密性を組み合わせた組織原理が機能しているからである。また、人びとは、それらを巧みに組み合わせながらメンバーとして関わりあうことで、フェラインへの関与を、じわじわと日常生活のなかの利益へとつなげていくのである。

この論文では、「見えるコード／見えないコード」という概念を用いることで、フェラインにみられる現象を包括的かつできる限り明確に捉えることができた。また、フェライン間の関係性やメンバー間の関係性に注目したことで、一枚岩的な描写が多かったフェラインが、実際には多様性に富んでいること、人びとの関わり方も目的遂行という点では共通していても、その実態には差異があること、そうした関係性の構築・維持には、定款に現れない暗黙裡に共有された規範が作用していることがわかった。

従来のフェライン研究は、主にゲマインシャフト／ゲゼルシャフトの二元論を下敷きとした議論であった。しかし、フェラインの全体像をみると、それがそのいずれかに類型化できるものではないことは明らかである。「見えるコード」と「見えないコード」が絡み合い、見え隠れし、共存することで成り立っている組織と捉えることが妥当といえる。そして、そのような柔軟さと多様性を備えているからこそ、フェラインは近代社会の確立という近代ドイツの課題に貢献したし、21世紀を迎えた今日も、第3セクターやNPO活動の担い手として機能し続けているのである。

論文の審査結果の要旨

山田香織の論文「フェラインの民族誌—ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション—」は、ドイツのフェライン（Verein、アソシエーション）に関わる人びとの民族誌的記述を行うことによって、「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」という従来の方の見方の再考を目的としている。

本論文は先行研究を、民族学はもちろんのこと歴史学、社会学、民俗学まで幅広く渉猟し、本研究を位置づけ、バイエルン州のA町の全てのフェラインを概観した後、中心的な研究対象である「男声合唱団（1906年創設）」の地域社会での位置づけを明示している。その上で、次の三点で優れた論考を展開した。

第一に、当該の男声合唱団に対して、フェラインの定款内活動及び成員構成を「見えるコード」、定款の外にある活動及び人間関係を「見えないコード」と明確に定義づけることによって、両者が作り出す組織の「二重らせん構造」に着目した。例えば、定款に記された、目的、非宗教性、非政治性、民主的な組織運営、開かれた成員資格を「見えるコード」とし、入会の経緯、練習を行うガストハウスでの席順、宗教、政治に関する各成員のスタンスなどを「見えないコード」とし、詳細な調査に基づき、両者の絡み合いを明らかにすることで、成員間の関係性等を浮き彫りにすることに成功している。

第二に、「見えないコード」という問題設定によって、フェラインの旗に着目することが可能になった。フェラインは、法の枠内外で、様々な形で設立されるが、設立したからといって、地域社会の中で簡単に受け入れられるわけではない。一方、設立後数十年を経て、旗を所有すると、教会で聖別式と呼ばれる儀式が行われる。その時、地域内外のフェラインが招待され、それぞれの旗を掲揚する。旗の所有から一連の儀式によって、新規旗所有のフェラインは、地域社会に名実ともに承認されることになる。また、その他の既存の旗所有フェラインは、儀式の際の整列順、ペナントリボンの授受の上下関係等によって、団体間の関係性が再確認される。「旗の所有から聖別式」に至る一連の儀式は、フェラインの「通過儀礼」といえる。その点での民族誌的記述は、特に秀逸である。

第三に、メンバー間での親称の使用法、挨拶の手法など細かな所作の分析、さらに、メンバーが誰の紹介で入会したかといった経緯、メンバーの誕生日会や葬儀の出席状況などの基礎資料を丹念に集めることによって、メンバー間の対等性、非対等性の度合いや親密性の状況を浮かび上がらせた。外国人や移住者を地域社会に包摂し、社会的、経済的格差のある住民の間に、ある種の連帯を生み出す機能をもつことを明らかにするなど、「見えないコード」を理解することが、フェラインの社会的機能を理解する上で重要なポイントである点も学術的に解明している。

以上のことから、著者はフェラインを、地縁結合の「ゲマインシャフト」的なるものか、あるいは定款に基づく「ゲゼルシャフト」的なるものかという従来二分法によって理解するのではなく、「見えるコード」と「見えないコード」の二重性をもった立体構造として捉え、その時々において「見えるコード」あるいは「見えないコード」が、相互に前面に出るダイナミクスとして把握することに成功した。この点は本論文の最も輝かしい部分である。

本論文は、2000年11月から約二年間の本調査、その前の二度にわたる予備調査、さらに補足調査と、計4回に亘る詳細なフィールドワークの結果をもとに、豊富なデータから論証しており、これまでほとんど取り上げられなかったフェラインの民族誌としてすぐれた内容を有している。

審査会では、そのデータが十分に消化しきれていないという指摘もあったが、これは裏返せば豊富なデータを集めたことを意味している。また、既存の理論に基づいた方が手堅いのではないかという意見も出されたが、これはその分オリジナリティが高い手法に積極的に挑戦したということでもある。

以上によって、本論文は学位に値し、山田香織は学位を取得するに足る十分な研究遂行能力があると審査委員会は一致して判定した。